



満州ブームを先取り?! 浅丘ルリ子モデルの小説

コピーライターとして活躍し、エッセー「ルンレンを買っておうちに帰ろう」でベストセラー作家に、そして直木賞作家へ。自らの手でシナレラストーリーをつかみ取ってきた作家林真理子さんは、フジテレビのイメージキャラクターを務めたこともある。メディアの寵児となったデビュー当時から現在に至るまで、その言動やライフスタイルが人々の注目を集めてきた。エッセーに書く人物は時の人となり、小説で描かれる女性像は女の本音を映し出す。そんなふうには時代を切りひらいてきた林さんは、いま何を狙っているのだろうか。

今年5月、林さんが上梓した作品は、女優浅丘ルリ子さんをモデルに、昭和の銀幕と恋に生きた女性の半生を描いた「RURIKO」である。

満州国という存在の特殊さにはずっと惹かれていました。

女の心理を巧みに描いた小説や、流行をいち早く見抜いたエッセーを生み出し続ける作家・林真理子さん。どのようにして人の気持ちに敏感に察知し、時代を先取る嗅覚を養っているのだろうか。その秘密は、日々たくさんの人に会い、自身の中に人物データファイルを蓄積することにあるようだ。

林真理子

林真理子 インタビュ

「いいみないか、彼女は話すと言っているよ」とすめられたことがきっかけです。大蔵省の役人であり、満州国の秘書官を務めていたというルリ子さんのお父様の存在に、興味がわきました。お父様は満映・満州映画協会の理事長だった、あの甘粕正彦とも親交があったと聞き、ルリ子さんが少女時代を過ごした満州国を起点に、甘粕大尉と絡ませて書いてみたい、と思いました。

「RURIKO」の連載がスタートした翌年には、満映で活躍した女優李香蘭を上戸彩さんが演じたテレビドラマが放映されるなど、世間では満州国が再び注目されるようになった。「もしや林さんはブームを予知していたのでは？」と思わせるほどのタイミングの良さだ。しかし林さんはブームが来るとは思っていませんでした。ただ、満州国という存在の特殊さにはずっと惹かれていました。日本の傀儡政権であったとしても、色々な人がロマンを満州国に抱いていたわけですから」と答える。

筆が進むと 登場人物が乗り移る

「RURIKO」には、石原裕次郎や美空ひばり、小林旭さんなど、昭和の大スターたちが登場する。執筆にあたって、林さんが実際にインタビューを行ったのは浅丘ルリ子さんのみ。あとは、当時の資料を参考にしながらすべて想像で書いた。

「ルリ子さんの前夫である石坂浩二さんにも取材を申し込みましたが、『文学作品として何をお書きになっても構いませんが、取材には応じられません』という返事をいただきました。さすがだなぁと思いましたね。」

作品中の登場人物は、誰もがその名を知る有名人。それだけに人物造形には苦勞もあつたようだ。

「みなさんよく知っている方ばかりなので、読んでいても違和感なく、しかも生き生きと描くのはなかなか大変でした。登場人物にキャラクターを与えなければ、物語は動きません。関係者の方がご存命の場合も多

かったので、心証を書きないように配慮しつつ、どのようなキャラクターを与えようかと思索しました。

林さんは、彼らが出演していた当時の映画や雑誌記事を研究しながら、登場人物たちのキャラクターを削り上げていた。

「ねえ、このあいだのレコーディング、どうだった？」
「もう、最高だったんじゃないの？」
旭はそれが癖で、機嫌がいい時、鼻に抜けるような声を出す。

（RURIKOより抜粋）

作中には、小林旭さんの癖がありありととらえた描写が続く。
「実際に小林旭さんを知る人から、小林旭って本当にこういうしゃべり方するんだよね。どうしてかわかったの？」と驚かれました。石坂浩二さんについては、「すっごく嫌な感じに書かれていて、かわいそう」という感想を持たれる方もいました。でも私としては嫌な感じに書いたつもりはな